

ポスター | 1-04 複雑心奇形

ポスター

複雑心奇形④冠動脈異常

座長:渡辺 健(北野病院)

Sat. Jul 18, 2015 11:14 AM - 11:44 AM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

III-P-005~III-P-009

所属正式名称: 渡辺健(田附興風会医学研究所北野病院 小児科)

[III-P-006]純型肺動脈閉鎖に対する初期治療— PTPVと open valvotomyの比較—

○亀井 直哉¹, 田中 敏克¹, 三木 康暢¹, 祖父江 俊樹¹, 小川 禎治¹, 佐藤 有美¹, 富永 健太¹, 藤田 秀樹¹, 城戸 佐知子¹, 大嶋 義博² (1.兵庫県立こども病院 循環器科, 2.兵庫県立こども病院 心臓血管外科)

Keywords: PA/IVS, PTPV, valvotomy

【背景】純型肺動脈閉鎖 (PA/IVS) において、2心室修復を目指して肺動脈弁に介入する方法として、カテーテル治療と外科治療がある。【目的】PA/IVSに対する初回介入として、経皮的肺動脈弁形成術 (PTPV) と open valvotomyでの治療経過の相違を検討する。【対象・方法】2006年から2014年にPA/IVSでの初回介入としてPTPVをtryした10例中、不成功に終わった4例 (1例は右室穿孔でショック) を除く6例 (P群) と、open valvotomy 6例 (S群) の経過を後方視的に検討した。【結果】両群間で介入時体重、右室拡張末期容積 (%N)、三尖弁輪径 (%N)、肺動脈弁輪径 (%N)、術後追跡期間に有意差はなかった。P群の使用バルーン径/肺動脈弁輪径比は100-125%であった。S群の1例で、三尖弁形成と体肺動脈短絡術が同時に行われていた。術後ICU滞在日数、挿管日数、PGE1投与日数に有意差はなかったが、入院日数はP群で有意に短かった (P=0.032)。肺動脈弁に対する再介入は、P群で2例にPTPVを3回、S群で3例にPTPVを4回、1例にMVOPを用いた右室流出路形成と三尖弁形成が行われていた。肺動脈弁への再介入の発生率と回数には有意差はなかった。術後中等度以上の肺動脈弁逆流は両群とも認めなかった。根治術到達ないし右左短絡の消失例は、P群で4例、S群で3例であり、残りの症例でも右室の発育がみられた。【結論】PA/IVSに対する初回介入として、PTPVと open valvotomyでは、その後の肺動脈弁への再介入や弁逆流の程度に差はなかった。RF wireの導入により今後PTPV try例が増加すると予想されるが、右室穿孔などによる急変リスクは依然としてあり、これに速やかに対応できる体制の整備は重要である。